

# 空夢

ナビゲーター：清水郁郎  
(元モビリティランド)

## 第4回 フライアバウト

【ソラユメ】さまざまな人たちが  
航空に携わり、空を愛する人びとの  
夢とチャレンジを紹介する物語



Photos: Monika Peirillo

オシコシ・エアベンチャーは70~80万人といわれる飛行機好きが集まる大イベントである。2008年にもF-22、V-22や数多くのウォーバードなど、誰もが見たい飛行機のパフォーマンスを繰り広げた。しかし普通のエアショーと違い、主役はEAAのメンバーであり、開催期間中は何千機もの軽飛行機・自作機・旧型機が、ひっきりなしに離着陸して、タワーには「World's Busiest Control Tower」(世界一忙しい管制塔)のパナーが掲げられている。オシコシは自分で飛行機を楽しむ人たちの世界なのだ。

というわけで、今日は少し雰囲気を変えて1人の若き女性を紹介しよう。モニカ・ペトリロ。ドイツ・ミュンヘンで生まれ育ち、ハリウッドで脚本家をしている。モニカは航空機マニアでもなんでもないが、冒険精神に富んでいる。ドイツにいたころはライセンスを取るのには特別の人…と信じていた彼女はアメリカで体験飛行をし、一念発起して24歳で免許を取った。そのモニカがEAA博物館の劇場で、彼女自作の「空の旅」の映画を見せ、航空ファンの注目を集めた。「Flyabout」がそのタイトル。オーストラリア大陸を数機が翼を連ねて海岸沿いに一周する壮大なツアーを背景に、彼女の「自分発見の旅」が重なってなかなか面白い。上映後に挨拶したモニカに、多くの観客から賞賛の言葉が出た。

モニカによると、このDVDを買う人の多くは娘を持つ父親だという。飛行機の操縦に限らず、人生の舵取りにおいても、多くの父親は娘の独り立ちに同様の体験を持つからではないだろうか。DVDは字幕はないが、www.flyaboutmovie.comで入手できる。モニカは「日本にも喜んで送ります」と言っている(読者プレゼントがあります。P.159参照)。



この映画はモニカ自身を見つめるセルフドキュメンタリーである。免許を取ったことをドイツの父親に知らせたところ、飛行機への関心もあったのだが、親としても心配したのだろう、58歳の父は、自分も急ぎライセンスを取得した。父娘は昔から大変仲がよく、欧州、アフリカなどを一緒に旅行してきた。親子で免許を取ったのだから、行ったことのないオーストラリア大陸を海岸沿いに一周しては？ まさに飛行機ならではの旅！ しかも父と娘と一緒に操縦するなんて!! いろいろ探したら、セスナ数機で飛ぶグループツアーがあった。唯一必要なのは、「横風の着陸がこなせること…」だという。「なんとかなるわ!」とモニカは考えた。

ツアーはセスナ172など5機。参加者は皆50~60代の夫婦連れで、そのなかではモニカはもっとも若く、かつ唯一の女性パイロットだった。みんな何千時間も経験のあるベテランばかりと知って、おおらかなモニカもさすがに心細くなった。

旅に先立ち操縦技量の確認テストがある。モニカはクリアしたが、父は免許を取って以来ほとんど飛んでいないので、テスト前に一緒に飛行場の周りを飛んでみた。父娘で初めて経験する離着陸だったが予想外のことが起きる。父のタッチダウン直前に、モニカはアプローチ速度が遅すぎて失速すると感じ、思わず父からヨーク(操縦輪)を奪い取った。これが2人の間におきた最初の「気まずい出来事」だった。

旅が始まるまでは、モニカは父と交替で操縦するものと期待していたが、ツアーリーダーは彼女を「責任を持つ機長」に指名した。モニカは「父がやるべき…」と思ったが、何しろ父は娘よりさらに飛行時間が少ないのである。ここにフライトログわずか140時間の「機長」が誕生することとなった。



小型機でコンボイを組んでオーストラリアを一周するツアーに父と参加したモニカ。小写真は左がコックピットの父と娘、右がカンガルーと遊ぶモニカ。

旅の2日目には早くも試練にぶつかり、豪雨と霧の中で高度わずか300ftほどの雲の下を飛ぶ。さらに悪いことにリーダーの機体を見失い、滑走路がどこだか分からない。真っ白の視界の中で交信を続けなんとか無事に着陸…と緊張の場面だ。

しかし4週間の旅は果てしない青い空、見渡す限りの自然の造形が素晴らしい。そして5機は思い思いに自由に空を駆け巡る。アボリジニの文化を知り、また、ゆったりした日々もある。カカドゥではクロコダイルを目の前で見、カンガルーと遊ぶ。キャサリンゴルジュでは鉄砲魚と戯れる。奇岩の連なるバンダラパンダや、大陸の北西の端では潮の干満による「水平の滝」など、空からしか見られない大自然には、この旅の魅力が溢れている。

モニカと父の間の、コックピットで息が合わないという問題はむしろ深刻になった。その後も何度かモニカが思わずヨークに手を出す場面があった。父は娘に神経質すぎると言い、娘は「失速しそうだし責任があるのだから…」と反論した。モニカは自分の方が父より経験が多いという状況を生まれて初めて体験し、「世代の交替」を感じて複雑な思いにとらわれる。オーストラリアの先住民アボリジニにはWalkaboutという習慣があって、成人になるころ、1人で大自然と向き合い己を見つめる旅をすると言う。家族全員の命を預かって飛行機で旅をする…というのは彼女のWalkaboutならぬFlyaboutであった。

彼女は旅のなかで確実に自立し、また父も最愛の娘がいまや自らの判断で飛行し、その点で自分を上

回っていることを受け止めた。モニカはこの家族にもある親子の関係を、日本では想像もできない飛行機の旅という非日常的な体験を通して、美しいオーストラリアの大自然を背景に映画にまとめ上げた。

「ブリスベンの町が再び水平線に現われたときに感じた爽快な気持ち、達成感は忘れられない。飛ぶことはお金持ちの趣味と置いておいて、飛ぶことはそれを夢見る人のもの。夢があるなら、やらなくては!」と語る。空はモニカに素晴らしい夢と自分の発見を与えてくれた。



フライトログ140時間でツアーに参加したモニカが機長に任命されたが、機長である娘と父親の関係は微妙だった。下写真はツアーに参加したセスナ172など5機の航空機。

